

# アイスランド語における「呼びかけ」のプロソディー に関する覚書

三村 竜之

## Notes on the Prosody of the Vocative in Icelandic

MIMURA, Tatsuyuki

**Abstract:** This paper aims at revealing several prosodic aspects of personal names and kinship terms used in addressing a person. The morphology of Icelandic does not have separate forms for the vocative case, and personal names and kinship terms are prosodically marked by the following means when used to address someone:

- i) keep pitch-range (pitch-span) higher.
- ii) make the third syllable from the left edge audibly salient by assigning a high-level or falling tone and/or lengthening the vowel; the ultimate syllable will be made prominent instead when personal names and kinship terms are mono- or bisyllabic.
- iii) [optional] lengthen the vowel in the ultimate syllable if it is not prosodically marked.

There are still some cases which the present study cannot provide clear explanation for, and the author also points out remaining methodological and theoretical issues to be solved to support and improve the present study.

**Keywords:** personal names/kinship terms, stress (accent), rhythm, pitch range, the number of syllables, syllable structure, falling tone, vowel length/quantity

### 1. 序

#### 1.1 本研究の背景

例えば、遠くにいる人物に対して「〇〇さ〜ん、(ちよつとこつちに来て。)」と声をかけることがある。このような一語文として用いた人名や親族名称の「呼びかけ (vocative)」は、単独(引用形 (citation form))での発音とは異なる音型を伴うことが多い。例えば日本語では、「イントネーションがアクセントの型を崩すことはないということが言える」(天沼他(1978: 154))という認識が一般的であったが、一方で、呼びかけのイントネーションが語本来のアクセント型を壊すなど何らかの影響を与えることがある、等々の報告もしばしばなされている(例: 鹿児島県出水市方言; cf. 木之下(1954: 92))。また、日本語ではないが、筆者

がここ 5, 6 年に渡り研究調査を進めているアイスランド語<sup>1</sup>においても、呼びかけとして発せられた人名や親族名称の音型が引用形のそれとは異なることを筆者は度々感じていた。しかし、具体的に音型がどのように崩れるのか、詳細に関しては不明なままであった。

先行研究に当たってみても呼びかけの音形に関する情報は得られなかった。アイスランド語の音声研究の歴史は長く、音声学や音韻論の研究書（例: Kristján Árnason 2011）や発音に関する概説書（例: Indriði Gíslason 他 1993）、外国人学習者向けの発音教材（例: Ari Páll Kristinsson 1988）、イントネーションに特化した研究論文（例: Dehé 2009）など研究成果は豊富であるが、管見の及ぶ限りでは、呼びかけのイントネーションや音形に言及した先行研究は皆無である。

このような経緯から、筆者はアイスランド語における呼びかけイントネーションや関連する韻律特徴の詳細を解明すべく予備的な実地調査（フィールドワーク）を行った。本稿は同予備調査の報告であるとともに、調査結果の整理と考察を通じて、呼びかけの音調や卓立の型を決定する諸条件の解明を試みる。また、未解決の問題点や課題にも言及したい。

## 1.2 予備知識: アイスランド語のプロソディー

本節では、考察のための前提知識として、アイスランド語の韻律的特徴について概略する。

アイスランド語は強弱（強さ/ストレス）アクセントの言語である。聴覚的に最も顕著な卓立、いわば主強勢は、(統計学的に厳密な数値ではないが) ほぼ 9 割方、第一音節（左端の音節）に置かれる<sup>2</sup>。主強勢の置かれた音節には、主として高平調 (high-level tone) が現れるが、微弱な上昇調や下降調も現れうる。これらの音調は主強勢の置かれた音節の構造（例: 長母音を含む音節には下降調が現れやすい）や発話の速度等々によって決定されるもので、いわば広義のイントネーションであり、語ごとに音調の型が固有の特徴として決まっているわけではない。この意味で、これらの音調はアクセントではない。

主強勢を担う音節は音節構造（音節量）の点で制約があり、当該音節がそれ自体で一音節語を成す場合は、CV(C)という構造は許されない（一方、CVCC, CVV(C) は許される; VV は長母音<sup>3</sup>）。なお、アイスランド語では、主強勢の置かれた音節から（右に）数えて奇数番目の音節に「副次強勢 (secondary stress)」が置かれると言われているが（例: Eirík Rögnvaldsson 2013: 48）、筆者の観察では「副次強勢」を担う音節は CV 構造も許容されるようである<sup>4</sup>。

<sup>1</sup> 印欧語族ゲルマン語派の北ゲルマン諸語の一言語。アイスランド共和国（人口: 363,393 人（2019 年 11 月 1 日時点; 典拠: Þjóðskrá Íslands）の公用語。

<sup>2</sup> 第一音節に主強勢の現れない語に関する詳細は、唯一、(他のゲルマン語からの場合も含めて) 外来語であるという点のみが明らかとなっているに過ぎない。筆者自身、それ以外の条件等に関しては皆無と言ってよいほど明らかにすることができていない。アイスランド語は外来の事物や概念に対して独自の語を生み出すことで外来語を回避する傾向が強く、そのため外来語のアクセント調査が困難であることが要因として挙げられる。調査方法の改善が急務である。

<sup>3</sup> 詳細に関しては稿を改めざるを得ないが、多音節語の場合は、主強勢を担う音節は CVC の構造でも許容されるのではないかと筆者は考えている (CV のみが許されない)。

<sup>4</sup> 先行研究で「副次強勢」とされているものは、所謂、リズムの拍 (beat) であると筆者は考えており、また、「主強勢の置かれた音節から数えて奇数番目の音節」という先行研究の主張に関して筆者は懐疑的である (三村 2015)。

### 1.3 実地調査の概要

呼びかけの一次資料を採取すべく、筆者は文の読み上げ調査を2019年3月と9月に行った。概要は以下の通り:

- (1) a. インフォーマント: Auður Guðmundsdóttir 氏<sup>5</sup> (女性・1955年, Reykjavíkの生まれ)
- b. 事前に、「遠くの人に呼びかけるように」との指示を出した上で、読み上げを行った。なお、指示に使用した媒介言語はデンマーク語。
- c. プレゼンテーションソフトウェア (Apple社 Keynote) を用いて呼びかけ文を4秒ごとにノートパソコンの画面上にランダムに提示。一度に一回のみ読み上げてもらい (これを1セットとする)、合計で4セット実施した (具体例は(2)と(3)を参照)。
- d. 読み上げられた文はデジタル媒体にて録音<sup>6</sup>。併せて、調査ノートに文字資料としても記録。なお、インフォーマントの了承を得た上で、調査項目も含めた調査の一部始終を録音した。
- e. 上記の読み上げ調査の後、各人名や親族名称の引用形を採取すべく、聞き取り調査 (調査票読み上げ形式) を実施。同じくデジタル媒体や文字資料として記録した。

読み上げに使用した文は以下の通り (*imp.*: 命令形; *dat.*: 与格):

- (2) [人名], *komdu hingað og hjalpaðu mér!*  
*come imp. along here and help imp. me dat.*

「〇〇さん、こっちに来て手伝ってください!」

上記の[人名]の箇所に(3)に示す調査項目を挿入した形で呼びかけ文を提示し、読み上げてもらった (日本語訳の付されていないものは全て人名):

- (3) a. 一音節語 (2例) *Frigg Jón*
- b. 二音節語 (8例)  
*Bragi Egill Erla Inga Nonni Steinar mamma*「お母さん」*pabbi*「お父さん」
- c. 三音節語 (16例)  
*Eiríkur Friðleifur Guðmundur Halldóra Haraldur Hrafnhildur Ingibjörg Jóhanna Jónína Kristjana María Matthías Sigríður Sigurlaug Sigurður Valdemar*
- d. 四音節語 (8例)  
*Alexander Elísabet Hildimundur Ísabella Magdalena Sigurjóna Sigurleifur Verónika*

<sup>5</sup> Guðmundsdóttir 氏は筆者のこれまでのアイスランド語の調査においてインフォーマントを務めて下さった方である。氏に関するより詳しい情報は三村(2016)を参照されたい。長年に渡りインフォーマントとして筆者の調査に尽力して下さっている Guðmundsdóttir 氏にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

<sup>6</sup> 録音に使用した機材は、3月の調査では次の通り: Marantz 社 PMD661MKII, audio-technica 社 AT899 (サンプリング周波数: 96kHz)。9月の調査では手荷物の遅延のため以下の予備機材を使用した: SONY 社 LCD-SX950, SONY 社 ECM711 (サンプリング周波数: 44.1kHz)。

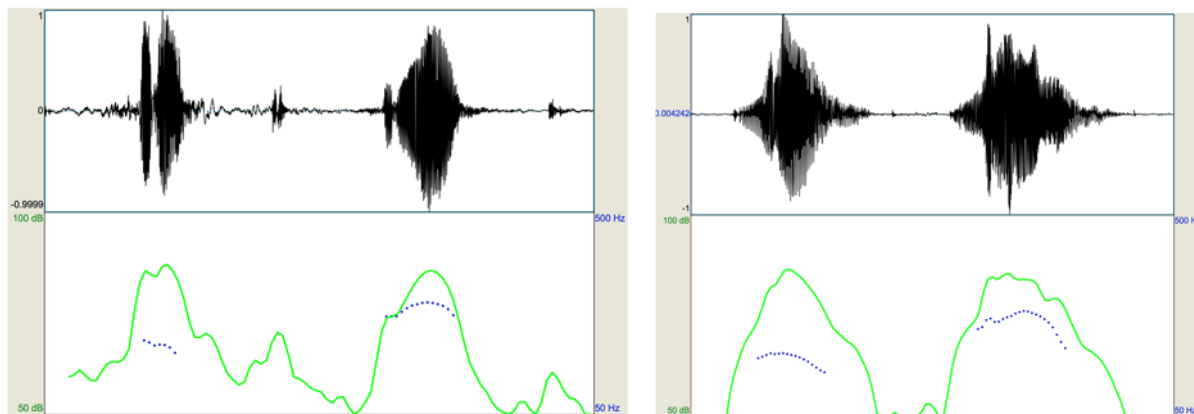


図 1: *Frigg* の引用形(左)と呼びかけ(右)

図 2: *Jón* の引用形(左)と呼びかけ(右)

調査項目の選定にはインターネットサイト *Ísland.is* の *Mannanafnaskrá* を使用した。公式に（法的に認められて）登録されている人名の一覧から、例えば語学教材に用いられるくらいに一般的なものを調査項目として選び出した（前頁の(3)）。同サイトを通じて検索可能な人名はおよそ 2000 件にも上るが、今回の調査は予備調査であるため、調査項目はごく少数に限定した。一音節語と二音節語に関しては、呼びかけの音型が経験的に予測可能であったため項目数を最低限度にとどめ、三音節以上の語の項目数を増やした。また、呼びかけの音型と主強勢の位置との関連も考慮して、少数ではあるが *Verónika* など外来の人名も取り入れた。

なお、アイスランド語は形態論が複雑な言語として知られているが、名詞と代名詞の格は主格・対格・与格・属格の四つのみで、呼格はない。呼びかけとして使用されている人名や親族名称は、その語形から推察して主格であると考えられる。

## 2. データ：呼びかけの音形

### 2.1 一音節語

前述した 2 例の一音節語の引用形と呼びかけの発音は以下の通り<sup>7</sup>：

(4)

	引用形	呼びかけ
<i>Frigg</i>	[fríḡḡ F(~H)]	[frí(·)ḡḡ H(~F)]
<i>Jón</i>	[jóʏn F]	[jóʏ(·)n F]

図 1 と 2 に示したピッチ曲線（図中の点線の曲線<sup>8</sup>；以下、同様）から読み取れるように、

<sup>7</sup> 各音節の音調の表記には次の記号を用いる：H (高平調/high-level tone), F (下降調/falling tone), M (中平調/middle-level tone), L (低平調/low-level tone)。なお、各記号が示す音調は、筆者が主観音声学的観察（聴覚印象）に基づき、各音節の相対的な高さや音調の動きを捉えたものに過ぎない。従って、同一の記号で表記された音節であっても実際の高さや具体的な音調の動きは異なり得る点にくれぐれも留意されたい。

<sup>8</sup> 図中の実線による曲線は強度(intensity)を示す。なお、印刷が不鮮明になる嫌いがあるため、スペクトログラムは表示しない。音声波形とピッチ曲線の抽出には Praat (Version 6.1.08; Boersma and Weenink 2019) を使用した。

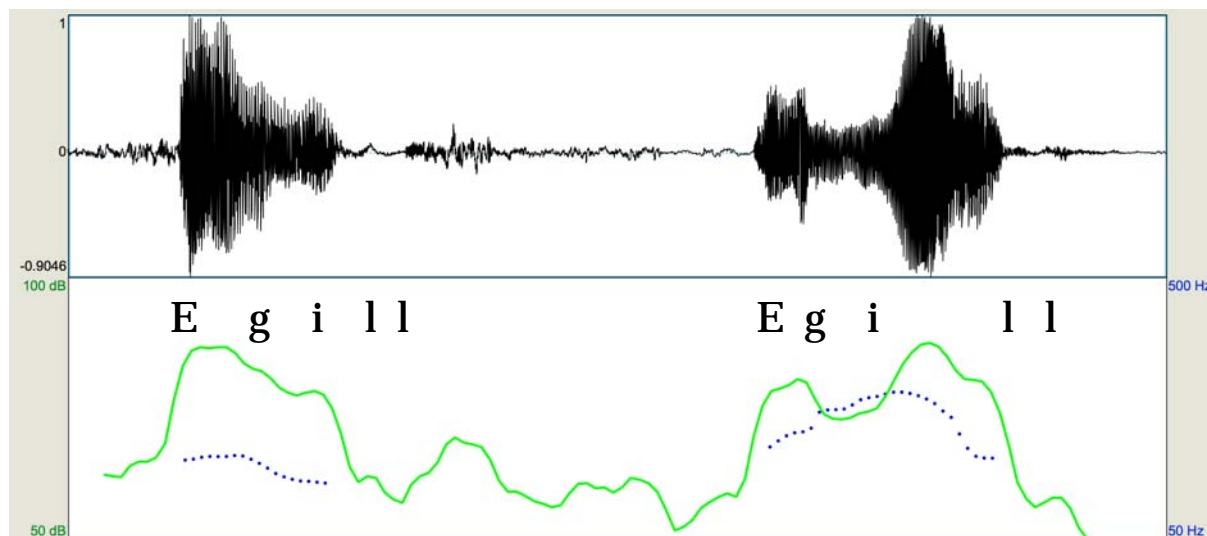


図 3: *Egill* の引用形 (左) と呼びかけ (右)

*Frigg* と *Jón* のいずれの場合も、全体的な音調の概形は (ほぼ) 類似しているものの、呼びかけの方が引用形よりも全体的に音域が高い。また、ピッチ曲線の長さや音声波形の横幅から、呼びかけの場合の方が語全体の (特に母音の) 持続時間が長いことがわかる。

## 2.2 二音節語

二音節語の引用形と呼びかけの発音は以下の通り:

(5)

	引用形	呼びかけ
<i>Bragi</i>	[bráɪ.jɪ HL]	[bráɪ.jì: HF]
<i>Egill</i>	[éɪ.jit̚ HL]	[éɪ.jì:t̚ H(~R)F]
<i>Erla</i>	[ért.la HL]	[ért.là: HF]
<i>Inga</i>	[ín.ǵa HL]	[ín.ǵà: H(~R)F]
<i>Nonni</i>	[nón.nɪ HL]	[nón.nì: HF]
<i>Steinar</i>	[stéɪ.naɾ HL]	[stéɪ.nà:ɾ HF]
<i>mamma</i>	[mám.ma H(~R)L]	[mám.mà: HF]
<i>pabbi</i>	[p <sup>h</sup> áp.pɪ HL]	[p <sup>h</sup> áp.pì: HF]

図 3, 4, 5 に二音節語の代表例として *Egill*, *Inga*, *Steinar* の音声波形とピッチ曲線を示す (本頁並びに次頁を参照)。(5)の表と前述の図より、二音節語の呼びかけの音形に関して次の四つの特徴 (傾向性) を指摘することができる: i) 引用形と同様、主強勢は第一音節に現れている; ii) 母音量の増加と下降調の付与により第二音節に卓立が生じている (副次強勢として表記; 以下、三・四音節語に関しても同様); iii) 呼びかけの方が音域が高い; iv) 呼びかけの場合の方が語全体 (特に第二音節) の持続時間が長い。

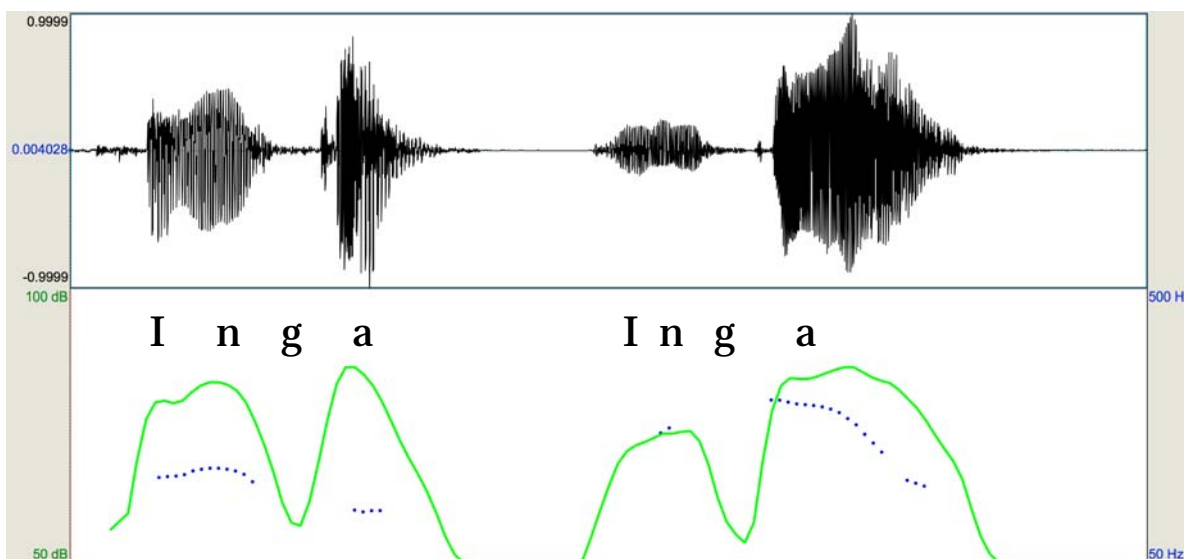


図 4: *Inga* の引用形 (左) と呼びかけ (右)

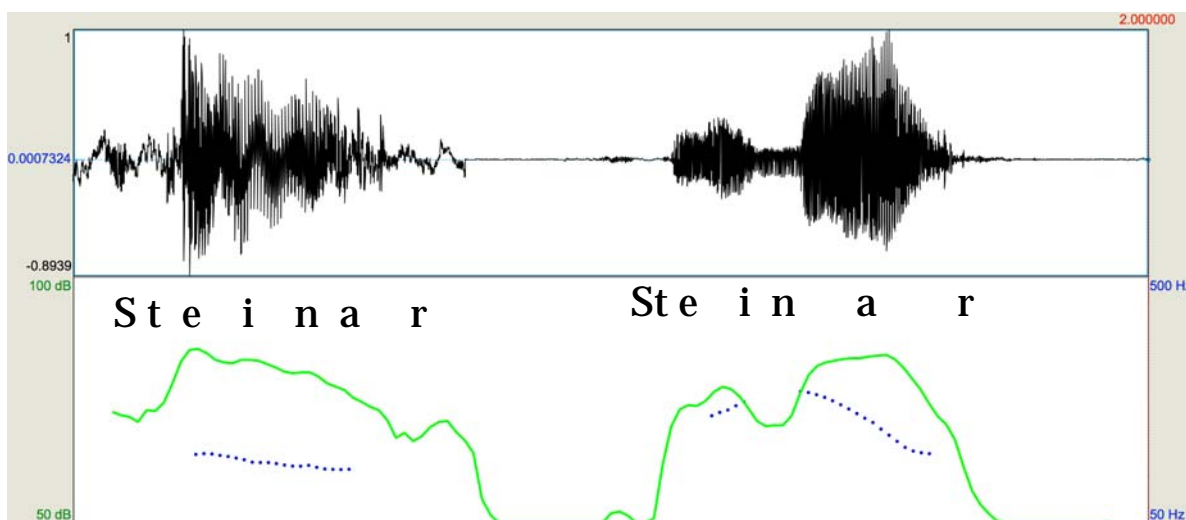


図 5: *Steinar* の引用形 (左) と呼びかけ (右)

### 2.3 三音節語

三音節語の引用形と呼びかけの発音は以下の通り<sup>9</sup>:

(6)	引用形	呼びかけ
<i>Eiríkur</i>	[éi.ri:kʰr̥ HML]	[éi.ri.kʰr̥ HHF]
<i>Friðleifur</i>	[frí(·)ð.lei.vʰr̥ HML]	[frí(·)ð.le(i).vʰr̥ HML] ★
<i>Guðmundur</i>	[gʷúð̥.mʰn.dʰ(·)r̥ HML]	[gʷúð̥.mʰn.dʰr̥ HHF]
<i>Halldóra</i>	[há:l.dòɽ.ra HFL]	[há:l.do(ɽ).rà: HHF]
<i>Haraldur</i>	[há:..ral.dʰr̥ HML]	[há:..ral.dʰr̥ HHF]
<i>Hrafnhildur</i>	[r̥ápn̥.hil.dʰr̥ HML]	[r̥ápn̥.hil.dʰr̥ HHF]
<i>Ingibjörg</i>	[ín̥.ǵi.bʲø̥rǵ HML]	[ín̥.ǵi.bʲø̥rǵ HML] ★
<i>Jóhanna</i>	[jóɽ.hàn.na H(~R)ML]	[jóɽ.hàn.na: HHL] ★
<i>Jónína</i>	[jóɽ.ni.na H(~R)ML]	[jóɽ.ni.nà: H(~R)HF]
<i>Kristjana</i>	[krís.tʲ(j)a.na HML]	[krís.tʲ(j)a.na· HML] ☺
<i>María</i>	[má(·).ri.(j)a HML]	[má(·).ri.(j)a HHL] ☺
<i>Matthías</i>	[má <sup>h</sup> t.ti.à:s H(~R)ML]	[má <sup>h</sup> t.ti.à:s HMF]
<i>Sigríður</i>	[síɽ.rí.ðʰr̥ HML]	[síɽ.ri.ðʰr̥ HHF]
<i>Sigurlaug</i>	[sí:ɽʰr̥.lø̥ɽ̥ HHF]	[sí:ɽʰr̥.lø̥ɽ̥ HHF] ★
<i>Sigurður</i>	[sí:ɽʰr̥.ðʰr̥ HML]	[sí:ɽʰr̥.ðʰr̥ HHF]
<i>Valdemar</i>	[vál.ðe.maɽ HML]	[vál.ðe.mà:r̥ HHF]

図 6, 7, 8, 9 に *Eiríkur*, *Jóhanna*, *Kristjana*, *Sigurlaug* の音声波形とピッチ曲線を示す（次頁並びに次々頁を参照）。(6)の表と前述の図より、三音節語の呼びかけの音形に関して以下の三つの特徴（傾向性）を読み取ることができる：i) 引用形と同様に、主強勢は第一音節に置かれている；ii) 全体的な音域が呼びかけの方が高い（(6)で見える限りでは（顕著な）区別のない *Kristjana* や *Sigurlaug* もピッチ曲線上では差異を確認することができる）；iii) 下降調の出現並びに（あるいは）母音の長音化により第三音節に卓立が生じている（但し、*Jóhanna*, *Kristjana*, *María* は除く）。なお、(6)の呼びかけの欄に伏した星印は、該当する語が卓立の位置や母音の長音化、下降調の点で（部分的に）例外的であることを示している。また‘Frowny Face’のマークを伏した語は、呼びかけの卓立が現れていない等の点で例外的な語であることを示している（以下、四音節語に関しても同様；詳細は第3節の「考察」を参照のこと）。

<sup>9</sup> 引用形の中には、副次強勢を有するものとそうでないものが混在しており、どのような語に副次強勢が現れるのか、また語のどの位置に現れるのかに関しては、未だ不明な点が多い。例えば *Ingibjörg* のように語源的に複合語である (*Inga*+*Björg*) 場合は、単独形 (*Björg*) の主強勢の痕跡として副次強勢を捉えることができようが、*Hrafnhildur* のように語源的に複合語 (*Hrafn*+*Hildur*) でありながら後部要素に副次強勢の観察されないものもある。また、*Jóhanna* のように、語源的には単一の形態素からなる語でありながら副次強勢を有するものもある。詳細は今後の研究に俟ちたい。

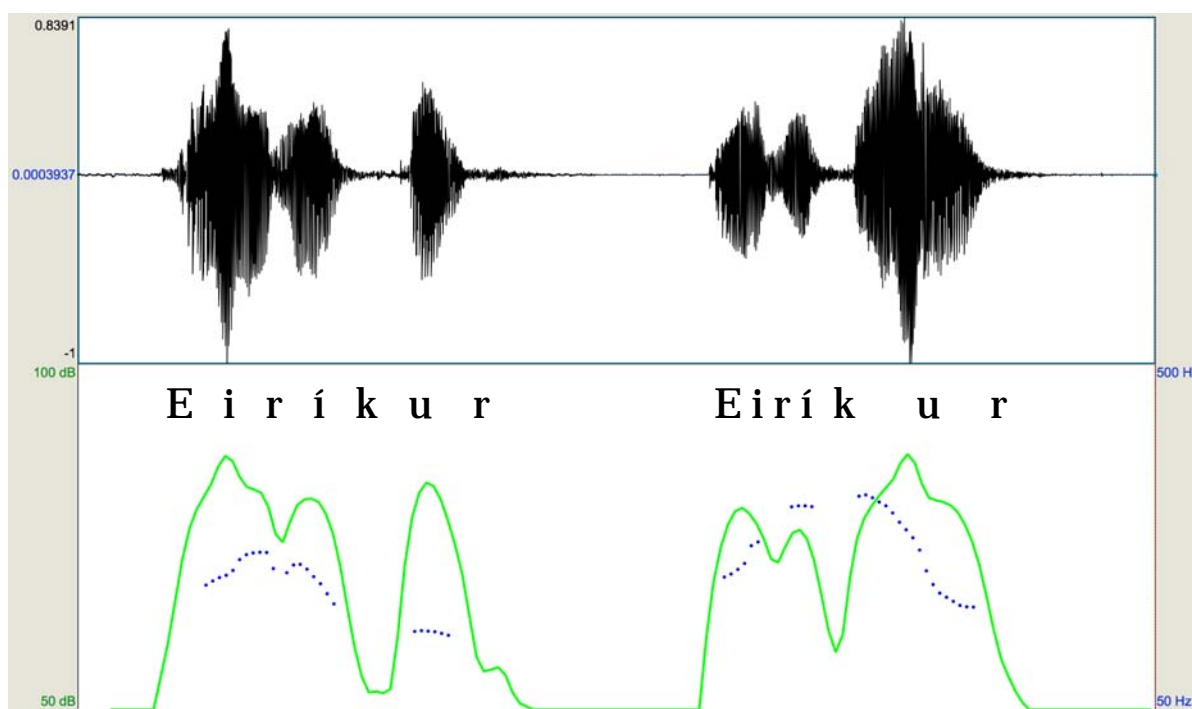


図 6: *Eiríkur* の引用形 (左) と呼びかけ (右)

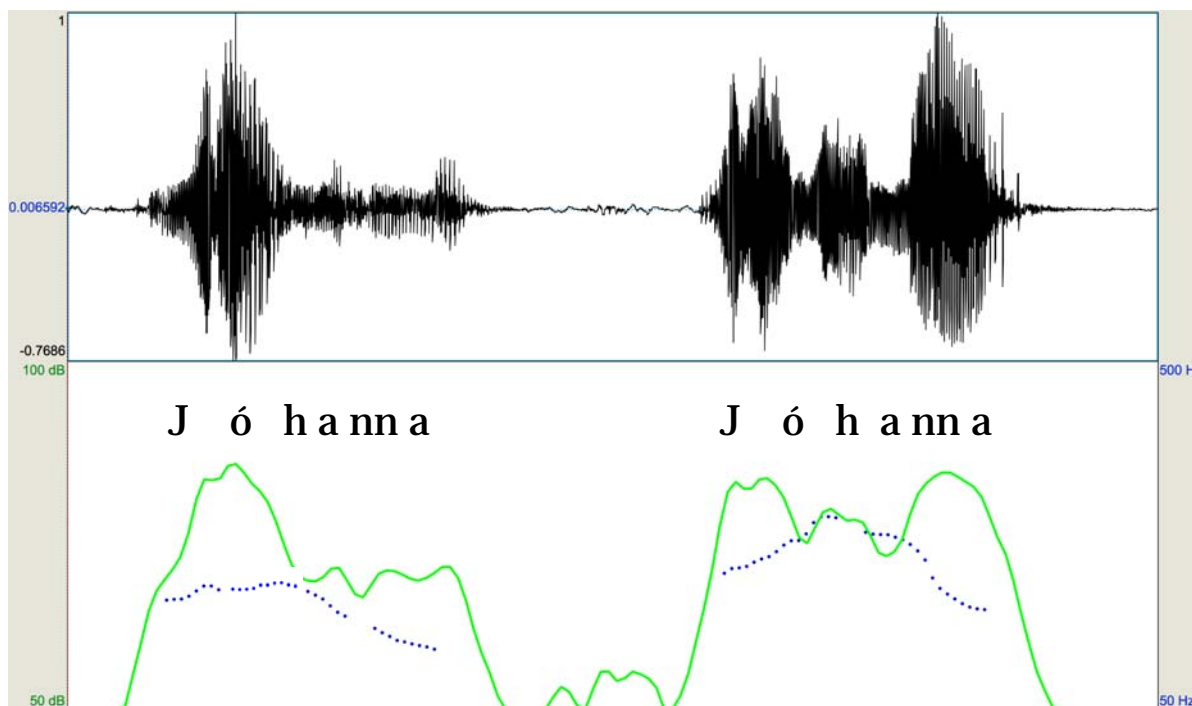


図 7: *Jóhanna* の引用形 (左) と呼びかけ (右)



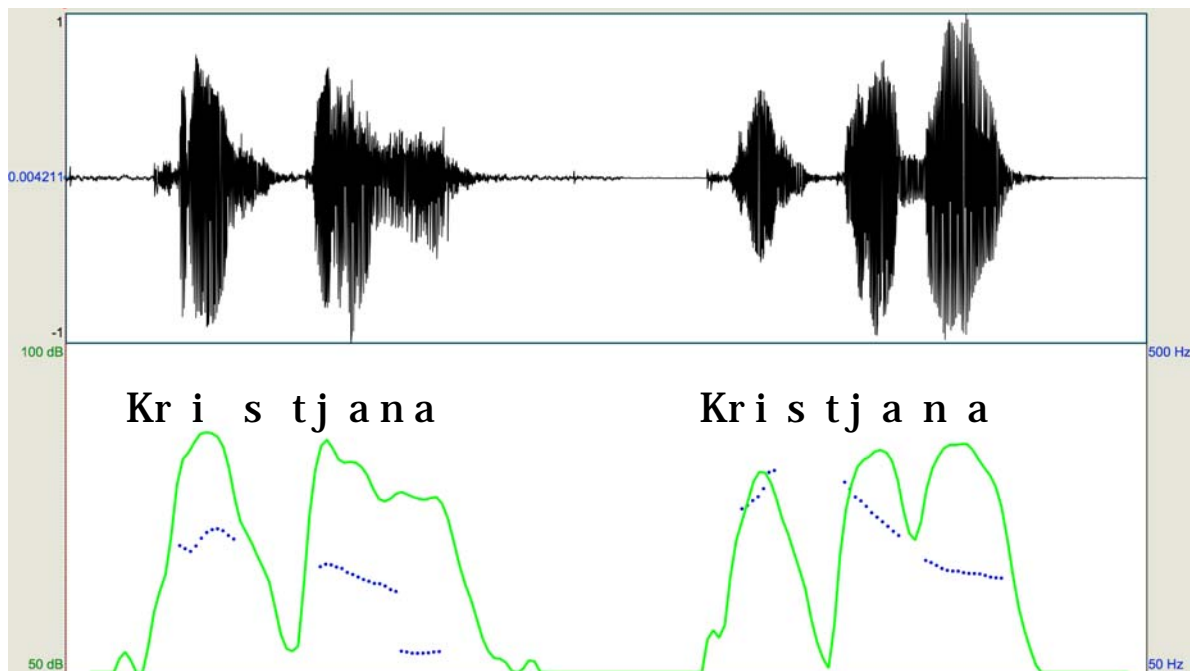


図 8: *Kristjana* の引用形 (左) と呼びかけ (右)

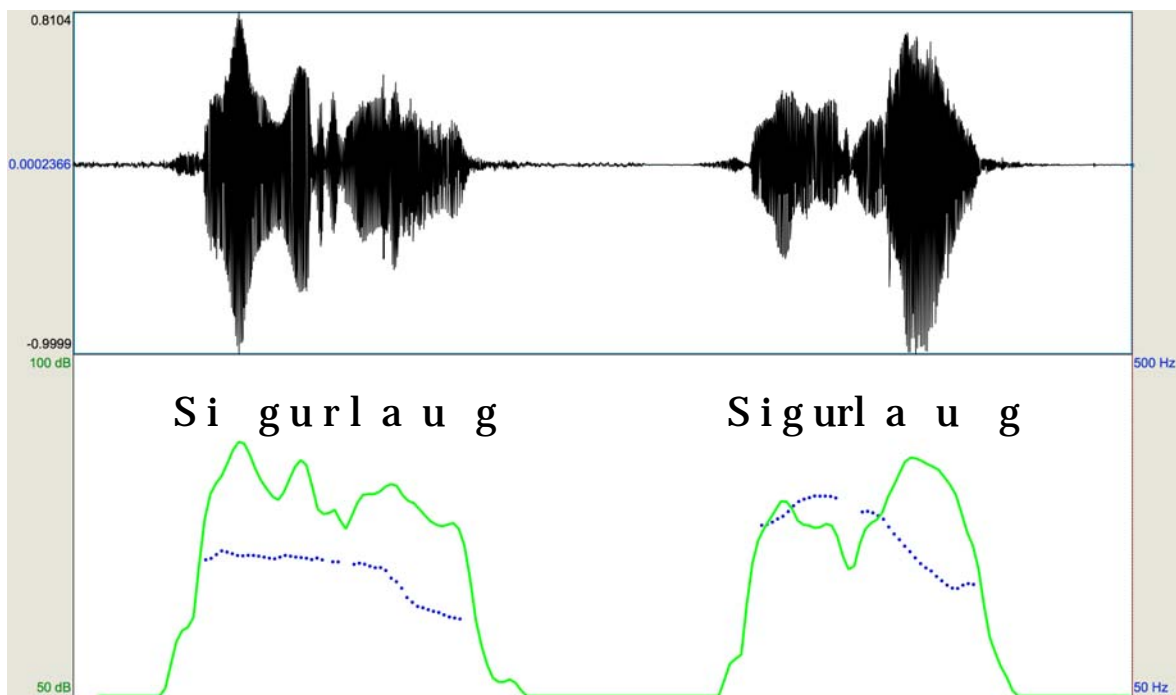


図 9: *Sigurlaug* の引用形 (左) と呼びかけ (右)

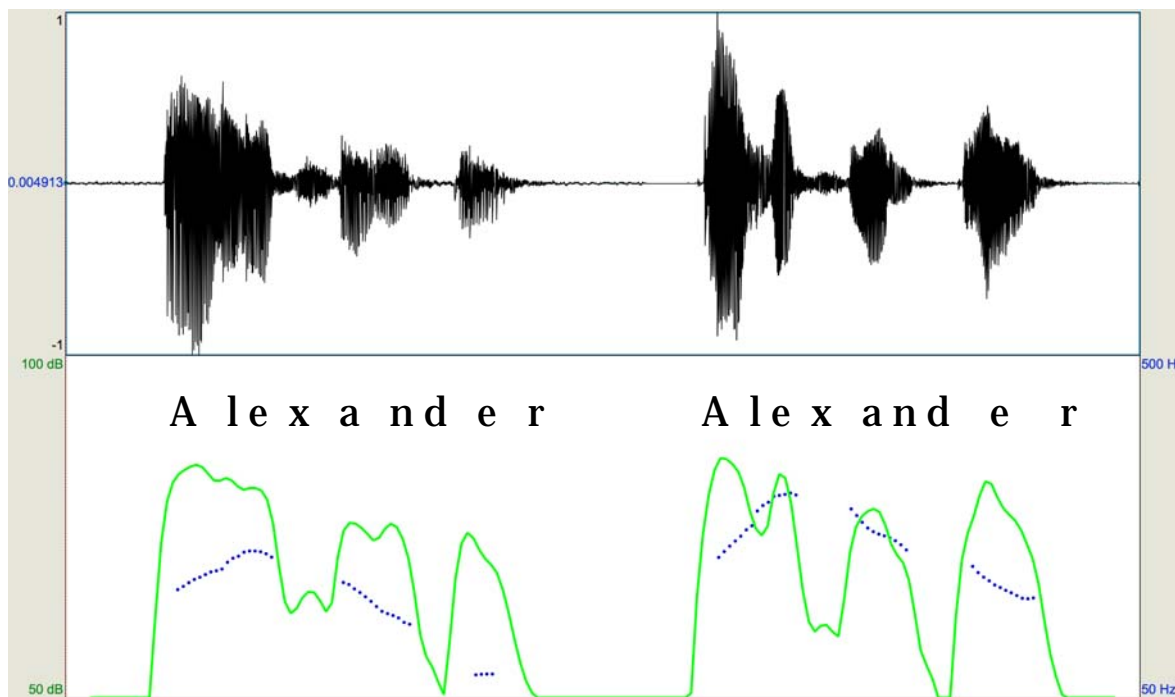


図 10: *Alexander* の引用形 (左) と呼びかけ (右)

## 2.4 四音節語

四音節語の引用形と呼びかけの発音は以下の通り:

(7)

	引用形	呼びかけ
<i>Alexander</i>	[á:lek.sàn.ðer HHFL]	[á:lek.sàn.ðer HHFL(~F)]
<i>Elísabet</i>	[e.lí(:).sa.bè't MHHF]	[e.li.sa.bét MHHF] ☹
<i>Hildimundur</i>	[híl.ðr.màn.ðar HHFL]	[híl.ðr.màn.ðar HHFL]
<i>Ísabella</i>	[í:sa.bèl.la HMML]	[í:sa.bèl.la HHFL]
<i>Magdalena</i>	[máγ.ða.lè:na HHML]	[máγ.ða.lè:na HHHL]
<i>Sigurjóna</i>	[sí:γur.jòγ.na HHFL]	[sí:γur.jòγ.na MHFL] ☹
<i>Sigurleifur</i>	[sí:γur.lèγ.vur HHFL]	[sí:γur.lèγ.vur HHFL]
<i>Veróníka</i>	[vèr.ɔ(v).ni.ka HMML]	[vèr.ɔ(v).ni:ka HMFL]

図 10, 11, 12, 13, 14 に *Alexander*, *Elísabet*, *Hildimundur*, *Sigurjóna*, *Sigurleifur* の音声波形とピッチ曲線を示す (本頁、次頁、並びに次々頁を参照)。(7)の表と前述の図より、四音節語の呼びかけの音形に関して以下の五つの点を指摘することができる: i) 呼びかけの方が全体的な音域が高い (従って、(7)においては (ほぼ) 差異のない *Hildimundur* や *Sigurleifur* もピッチ曲線では引用形との音域の差異が確認される); ii) 音声波形の長さから呼びかけの方が全体の持続時間が短い; iii) 主強勢の位置は引用形の場合と同様、第一音節である (但し、*Elísabet* と *Sigurjóna* を除く); iv) 第三音節 (次末音節) に H や F の音調が現れており、また *Veróníka* の

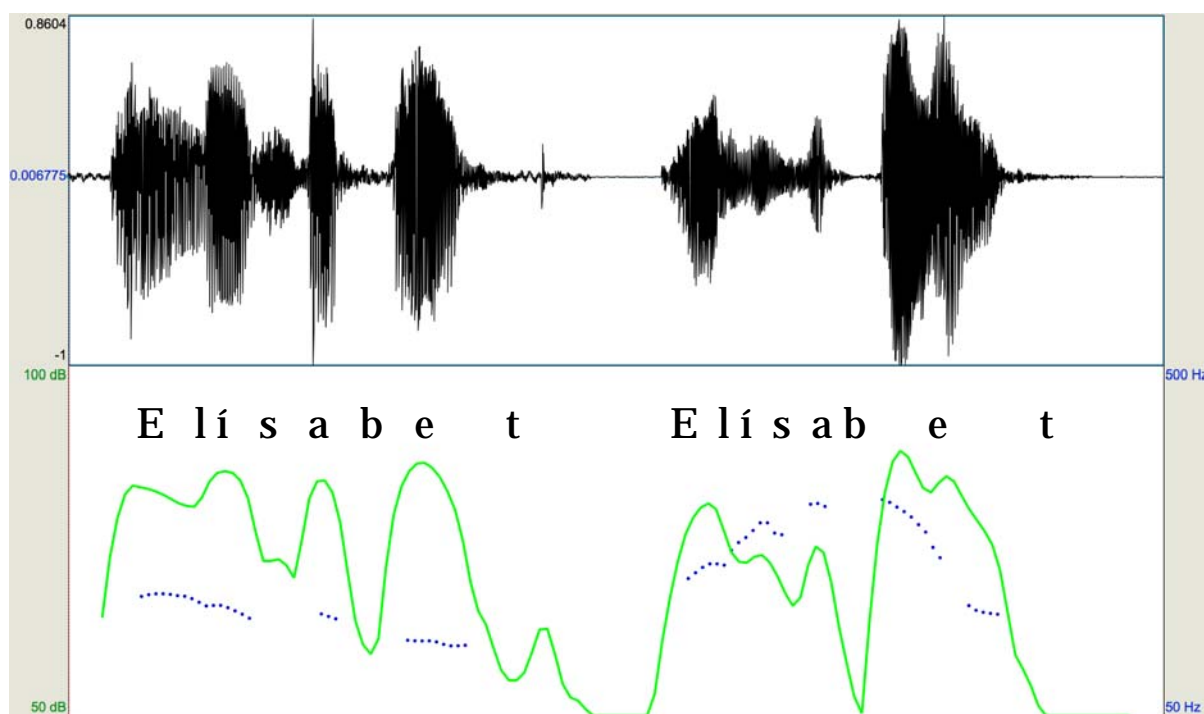


図 11: *Elísabet* の引用形 (左) とよびかけ (右)

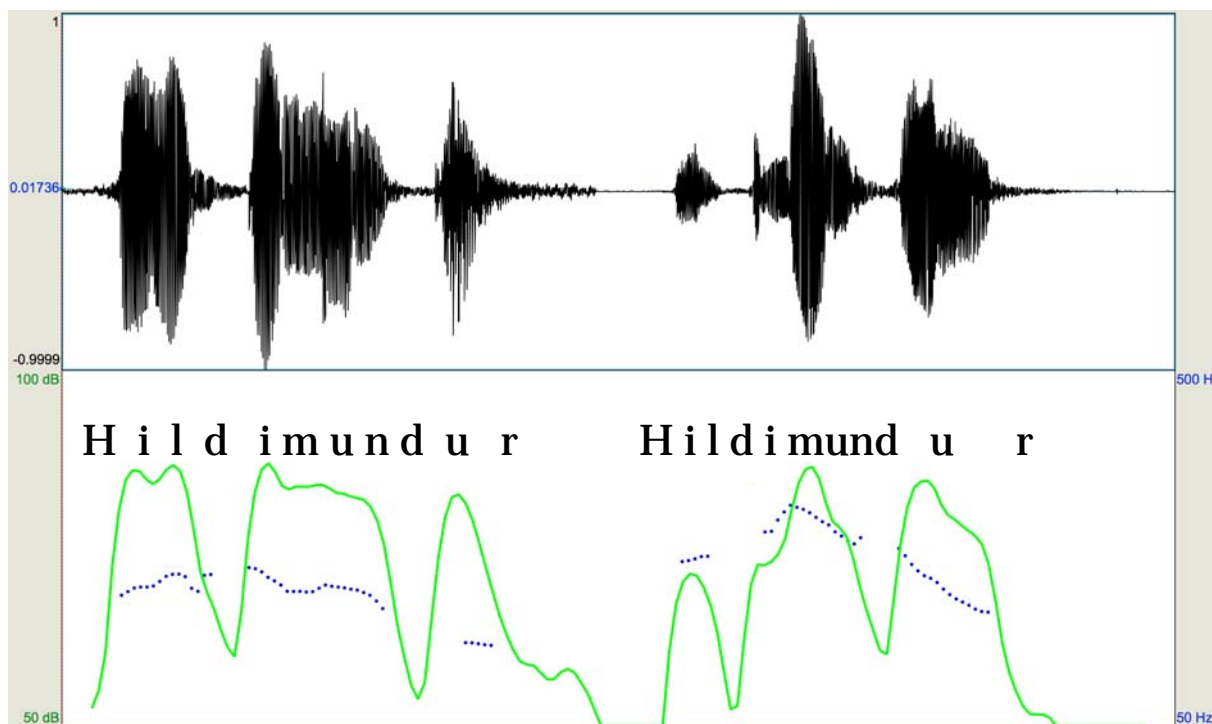


図 12: *Hildimundur* の引用形 (左) とよびかけ (右)

一例に限られるが、母音の長音化も生じており、その結果、第三音節に卓立（副次強勢）が現れている（但し、*Elísabet* と *Sigurjóna* は除く）；v) 第四音節（末尾音節）の母音の長音化は *Alexander* と *Hildimundur* の二例のみ。

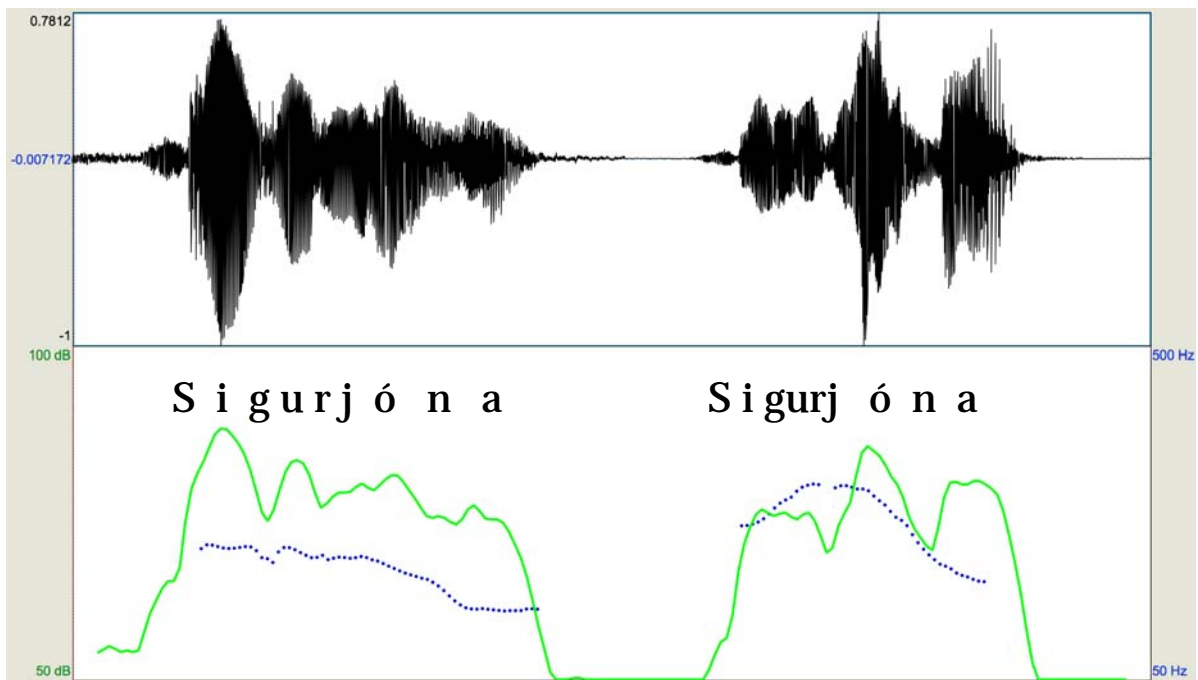


図 13: *Sigurjóna* の引用形 (左) と呼びかけ (右)

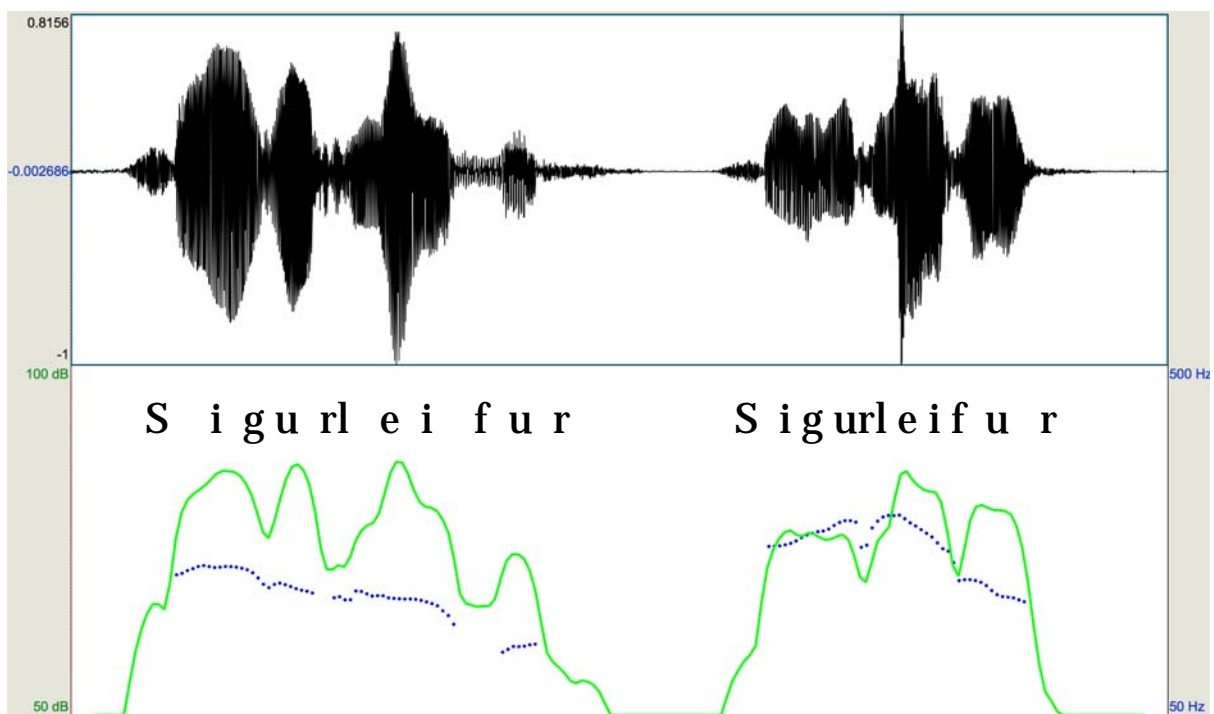


図 14: *Sigurleifur* の引用形 (左) と呼びかけ (右)

### 3 考察: 呼びかけの音形の諸特徴

前節では音節数ごとに分けて、呼びかけの音形に共通する特徴を確認した。既知の通り、特に四音節語に関しては呼びかけの音形に関する一般特徴を導くことが困難であった。本節では、前節にて提示したデータを整理すべく、アイスランド語の呼びかけ全般に見られる特徴や傾向性を導く。さらに、傾向性として指摘するに止まらざるをえず、一般特性としての抽出が困難であることの背景や様々な要因についても考察する。

#### 3.1 音域

音節数を問わず、全ての呼びかけに共通する特徴として、全体的な音域の上昇が挙げられる。図 1 から図 14 のいずれにおいても、呼びかけのピッチ曲線の方が全体的に高い周波数帯に分布していることが読み取れる。

そもそも、(少なくとも本研究で扱う) 呼びかけとは、少し距離の離れた位置にいる聞き手の注意を話者自身に向けさせることが目的であるため、引用形に比して相対的に音域が高くなることは至極自然のことと言えよう。

#### 3.2 アクセント型への影響の有無

採取された 43 例中、*Elísabet* と *Sigurjóna* の 2 例 ((7)の Frowny Face を付したものを) を除いてアクセント型(主強勢の位置)の変化は無い。従って、音節数を問わず、「原則的には」呼びかけは本来のアクセント型に影響を与えないと結論付けてよいと思われる。しかし、この 2 例の存在は看過できない。

詳細は今後の追加調査に俟たざるをえないが、現時点での筆者の解釈としては、*Elísabet* と *Sigurjóna* において主強勢の移動は生じておらず、副次強勢を伴う音節の卓立の方がより聴覚的に顕著であったにすぎない(有り体に言えば、筆者の聞き間違い)と考えている。副次強勢の方がより卓立していると聞き取ってしまった要因としては、引用形において主強勢を担っていた音節(*Elísabet* の *-lí-*, *Sigurjóna* の *Si-*)の母音が短音化している(と筆者は観察した)ことが挙げられる((7)を参照)。既に第 1.2 節にて言及した通り、アイスランド語において CV 音節は主強勢を担うことができず、仮に開音節であるならば母音は長母音でなくてはならない。また、*Sigurjóna* の場合は *Si-*の音調が中程度であったことも手伝い、当該音節の卓立の度合いを弱めている。しかしながら、主強勢を担っていた音節の母音が果たして短音化しているのか否かを、それも今回の事例のように微弱な持続時間の差異を、主観音声学的な観察にのみ依拠して論ずるのは甚だ危険である。音声波形やスペクトログラムの精査が必須である。今後の課題としたい<sup>10</sup>。

<sup>10</sup> 予々、筆者は痛感してきたが、アイスランド語のみならず、ストレスアクセントの聞き取りは思いの外困難である。高さアクセントや声調に比して、「語の一箇所が“強い”だけではないか」といった楽観的な見解を持つ読者もいるかと思うが、そもそも、その「強さ」が問題である。「強さ」とは単なる強度 (*intensity*)の問題ではなく、音の高低や持続時間、基本周波数の遷移など種々の音声特性や、音節量、音節構造などの韻律構造が複雑に絡み合ったものである。従って、実際の聞き取り調査においては、これらの様々な音的特徴に注意しつつ、半ば音韻論的な「解釈」を施しながら主強勢の位置を特定しているのである。厄介なこと

### 3.3 末尾音節の卓立（母音の長音化と下降調の付与）

三音節語の一部と四音節語の多数を除き、末尾音節の母音の長音化と（あるいは）下降調の出現により当該音節に副次強勢が置かれている点も呼びかけの特徴といえる。「末尾音節」と一般化すると一音節語が該当しないように思われる向きもあるかもしれないが、一音節語は、主強勢を担う音節それ自体が語の第一音節であると同時に末尾の音節でもあるため、一般化に漏れることは無い。

卓立を生み出している母音の長音化と音調の下降は一音節語と二音節語では例外なく観察される。*Egill* の第二音節 *-ill* のように、長音化の結果、アイスランド語では通常は許容されない\*(C)VVCC という音節が生み出されている点も興味深い。

三音節語では、末尾音節に卓立の現れていない例外的な語例も見受けられるが、真に例外的か否かは、末尾音節 (ultimate syllable) と次末音節 (penultimate syllable) の音節量を考慮する必要がある。例えば *Eiríkur* のように引用形の段階で末尾音節 (*-kur*) が重音節の場合は、次末音節 (*-rí-*) の軽重を問わず、末尾音節に卓立が置かれている (*Eiríkur* に見られるように、結果として、次末音節の卓立が失われることもある)。一方、*Jóhanna* や *Jónína* のように末尾音節が軽音節の場合は、次末音節の軽重に着目する必要がある。*Jóhanna* のように次末音節 (*-han-*) が重音節である場合はそこに卓立が置かれ（但し、母音の長音化は起こらない；後述の四音節語に関する考察も参照のこと）、一方、*Jónína* のように次末音節 (*-ní-*) が軽音節である場合は末尾音節に卓立が置かれる（次頁の図 15 も参照されたい）。なお、*Matthías* は、引用形の段階で末尾音節の母音が長いこと母音の長音化は厳密には生じていないが、下降調は現れているため、例外とは見なさない。

真に例外的な事例、謂わば、上記の一般化をもってしてもなぜ末尾音節に卓立が生じていないのかを説明できない事例は、*Kristjana* と *María* である（(6)の Frowny Face を付したもの）。いずれの語も引用形の段階で末尾音節と次末音節が軽音節であるため、前述の *Jónína* のように末尾音節に卓立が置かれることが期待されるが、(*Kristjana* では母音のわずかな長音化は観察されるものの)取り立てて聴覚的に顕著な卓立は観察されなかった（前掲の図 7 を参照）。現時点ではその理由は全くもって不明である。詳細は今後の再調査に俟たざるをえない。

また、末尾音節に卓立が観察されながらも下降調や母音の長音化が生じていない、部分的な例外が *Ingibjörg*, *Sigurlaug*, *Friðleifur* の三語である（(6)の星印の箇所）。なぜ *-björg* と *-laug* において母音が長音化していないのか、また *-fur* において下降調が現れていないのかに関しても、現時点では不明である。前述の *Kristjana* や *María* と同様、調査方法の改善や再調査が求められる。

---

に、(筆者の観察する限りでは)アイスランド語においてリズムの拍を担う音節は、主強勢を担う音節とは異なり、軽音節の場合も多々あり、さらに外来語の場合は、主強勢を担う（と推定される）音節も軽音節である（と観察される）場合がある。例えば、全て開音節からなる四音節語 *Honolulu* 「ホノルル」や重音節のみからなる二音節語 *Myanmar* 「ミャンマー」などは全体的な音調の型や遷移が主強勢の位置を特定するほぼ唯一の手がかりとなるが、イントネーションによっては判断が極めて困難となりうる。今一度、主強勢とそれ以外の卓立（副次強勢を含む）とを区別する音声学の並びに音韻論的な特性や条件とは何かを整理する必要がある。そして同様の考察は、アイスランド語のみならず、ストレスアクセント言語とされている世界の諸言語全てに関して急務である。

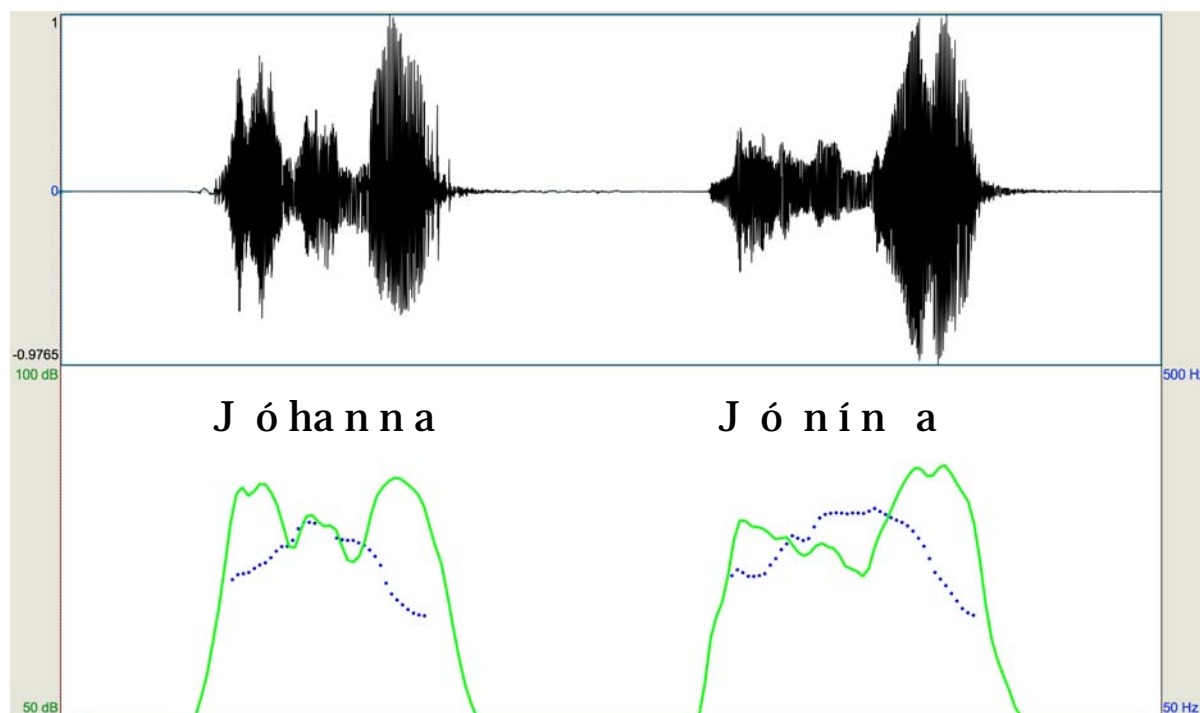


図 15: Jóhanna と Jónína の呼びかけ

四音節語の場合は、三音節語と異なり、末尾音節の軽重を問わず、次末音節に下降調や高平調が現れることで卓立（副次強勢）が置かれている（但し、第 3.2 節で触れた *Elísabet* と *Sigurjóna* は除く）。一見すると、先述の三音節語に関して導いた一般化が四音節語には適用されないように映るが、視点を変えてみると、三音節語も四音節語も、左から数えて三番目の音節に卓立が置かれているという点で共通していることが明らかとなる。これは、紛れもなく、第 2 節にて言及したリズムの型に合わせて呼びかけの卓立が生じていると解釈することができる。

ちなみに、一音節語と二音節語に関しては、そもそも三番目の音節が存在しないため、一音節語の場合は主強勢を担う音節自体に、また二音節語の場合は第二音節に母音の長音化や下降調を付与せざるをえない。一種の「下位規則」に類するものを設定することにはなるものの、一音節語と二音節語に関しても「左から数えて三番目の音節に卓立を置く」という形での処理が可能であると言える。

このように音節数に拘わらず統一的な解釈を試みると、三音節語 *Jónína* はむしろ例外であることが判明する。引用形が本来有する副次強勢がそのまま呼びかけの卓立として実現しているからである（引用形の第二音節の副次強勢が消失し（あるいは移動？）第三音節に呼びかけの卓立が現れている *Eiríkur* を参照のこと）。現時点では *Jónína* の扱いに関しては不明であり、今後の調査に俟たざるをえない。

なお、*Jónína* や四音節語のように、次末音節に呼びかけの卓立が置かれる場合は、当該音節が元来、開音節であれば母音の長音化が生ずるが、閉音節の場合は母音量に変化はないよ

うである ((7)の *Verónika* を参照のこと)。また、次末音節に卓立が現れる場合でも、*Alexander* と *Hildimundur* のように末尾音節の母音が長音化する例も確認されている。呼びかけにおいて母音の長音化が義務的であるのか否か、音節構造との関係など、今後の調査を通じて明らかとしたい<sup>11</sup>。

### 3.4 まとめ

以上の考察を整理すると、呼びかけの音形に見られる特徴や傾向性、音形を生み出すための規則を、以下のようにまとめることができる:

- (8) a. 全体的な音域を上げる。
  - b. 主強勢の置かれた音節とは別に、左から数えて三番目の音節を卓立させる。  
但し、以下の場合に注意:
    - i. 一音節語は語自体を (c.の手段により) さらに卓立させる。
    - ii. 二音節語は第二音節を卓立させる。
  - c. 当該音節の卓立は次の方法で行う:
    - i. 当該音節が本来、開音節であれば母音を長音化させる。
    - ii. 高平調あるいは下降調を付与する。
  - d. (任意で) 末尾音節の母音を長音化する (但し、末尾音節に呼びかけの卓立が置かれる場合は除く)

## 4. 結語

### 4.1 今後の課題

本研究の調査は予備的な性格のものであり、改善点や課題も残されている。本文中に言及した問題点の他に、以下に述べる三点が今後の課題として考えられる。第一に資料の補充が急務である。本稿で導いた結論を修正並びに強固にするためにも、特に実態の不明な点が多く残る三音節・四音節語に関して、より多くの資料が必要である。

第二に、主強勢も含めた広義の卓立の認定基準を整理する必要がある。本研究の資料は筆者の主観音声学的観察に基づいて採取されたものであるが、注 10 にて既に触れた通り、限界があることは否めない。今後は音響学的なデータも併せて導入し、主強勢とその他の卓立 (副次強勢、リズムの拍、呼びかけの卓立) との間の本質的な差異を追究し、主強勢やその他の卓立を認定する基準の整理と理論化を図らなくてはならない。

<sup>11</sup> 四音節語の全体の持続時間に関して一点補足する。呼びかけの卓立は母音の長音化や下降調の付与に伴い、その結果、二音節語において特に顕著であるが、当該音節の持続時間が増大する (音声波形より読み取ることができる)。それに反して、四音節語の場合は、図 9--14 の音声波形から読み取れるように、引用形の方がむしろ語全体の持続時間が長い。これは四音節語の引用形に固有の特徴ではなく、調査の方法に原因があったと考えられる。音節数を問わず、引用形は全て呼びかけ文の読み上げ調査の後で実施した。個々の人名や親族名称の音形を詳細に確認する意図があり、そのためか、インフォーマントの発音は自ずと嚙んで含めるようにテンポの遅いものとなった。また、四音節語はアイスランド語においては長い部類の語であるため、一層テンポのゆったりとした発音になってしまったと推察される。今後は、例えば *Ég heiti...* 「私の名前は〇〇です」のような目標文を用いるなどして引用形の採取を行う必要がある。



最後に、今後は幅広く、様々な種類の呼びかけを調査する必要がある。本研究では「呼びかけ」と一括りにして扱ったが、呼び掛ける相手との物理的かつ心理的な距離、関係、敬意の有無等々の要因で様々な呼びかけ方があり得るからである<sup>12</sup>。この面からも資料の補充が求められると同時に、いかにして調査者の求める発話意図でインフォーマントに読み上げを行ってもらえることができるか、目標文の提示方法等々、調査方法の改善も併せて必要である。

## 4.2 本研究の意義

以上、本稿では、アイスランド語の呼びかけのプロソディーに関する諸側面を明らかにしてきた。未解決の問題点や課題が残されはするものの、本研究の成果はアイスランド語の音声研究に新たな知見を提供するという意味で、大変有意義なものである。また、イントネーションを含め、呼びかけのプロソディーを扱った研究は日本語（諸方言含む）に関しては盛んである一方、その他の諸言語に関しては、英語などの一部の研究の進んだ言語を除いては未だに希少であると考えられるため、本研究の成果は、世界の諸言語のプロソディー研究にも資すると言えよう。さらに、第 1.1 節「本研究の背景」で触れたように、呼びかけの発音に関して紙数を割いたアイスランド語の教科書は皆無であるため、本研究の成果はアイスランド語の発音教育においても極めて有益であると言える。

## 参考文献

- \* 著者がアイスランド人の場合は、慣例に倣い名 (forename) に基づいて配列する。
- 天沼寧, 水谷修, 大坪一夫 (1978). 『日本語音声学』. 東京: くろしお出版.
- Ari Páll Kristinsson (1988). *The Pronunciation of Modern Icelandic: A Brief Course for Foreign Students*. Reykjavík: Málvísindastofnun Háskóla Íslands.
- Boersma, Paul and David Weenink (2019). *Praat: doing phonetics by computer*. Version 6.1.08. <http://www.fon.hum.uva.nl/praat/> 【2019年11月28日アクセス】
- Dehé, Nicole (2009). “An intonational grammar for Icelandic.” *Nordic Journal of Linguistics* 32, pp. 5-34.
- Eirík Rögnvaldsson (2013). *Hljóðkerfi og Orðhlutakerfi Íslensku*. Reykjavík: Málvísindastofnun Háskóla Íslands.
- Indriði Gíslason and Höskuldur Þráinsson (1993). *Handbók um íslenskan framburð*. Reykjavík: Rannsóknarstofnun Kennaraháskóla Íslands.
- 木之下正雄 (1954). 「出水方言における呼びかけのイントネーションについて」. 『鹿児島大学教育学部教育研究所研究紀要』 6, pp. 92-98.
- Kristján Árnason (2011). *The Phonology of Icelandic and Faroese*. Oxford: Oxford University Press.
- Mannanafnaskrá*. <https://www.island.is/mannanafn/leit-ad-nafni/> 【2019年3月11日、8月29日閲覧】
- 三村竜之 (2015). 「アイスランド語における副次強勢とリズムに関する一考察」. 『北海道言語文化研究』 13, pp. 1-14.

<sup>12</sup> 溝口(2018: 427)は、「1. 注意を引く(電話などを取り次ぐ際)、2. 責める、3. (隣の部屋などにいるか)存在確認、4. 葬式、5. 遠くにいる、6. 目の前にいる、7. 久しぶりに会った、8. 心配している、9. お願いをする」の九つの場面を設定して、東京方言の呼びかけイントネーションを調査している。

三村竜之 (2016). 「アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の音韻論的位置付け」. 『室蘭工業大学紀要』  
第 65 号, pp. 59-66.

溝口愛 (2018). 「東京方言の呼びかけイントネーション」 (ワークショップ「日本語のイントネーション」).  
『日本語学会第 157 回大会予稿集』, pp. 426-431.

*Þjóðskrá Íslands*. <https://www.skra.is/> 【最終閲覧 2019 年 12 月 27 日】

#### 執筆者紹介

氏名：三村竜之（みむら・たつゆき）

所属：室蘭工業大学ひと文化系領域・准教授

Email：m76tatsu@gmail.com